

## 「もう一つの翁」をめぐる

竹本 幹 夫

本年五月十二日に、横浜能楽堂で早稲田大学演劇博物館二世紀COE事業の一環として、観世鍔之丞師他の出演で「もう一つの翁」と題する実験公演を行う。成果報告は後日に譲るが、ここでその概要を解説したい。

演劇博物館のCOE事業は本年三月を以て終了したが、今回の公演は、本公演の準備研究として二年前から行われていた、その成果発表の意味を持つ。ここにいう「もう一つの翁」とは、南都（奈良）で幕末まで行われていた、神事猿楽専用の特殊な「翁」のことである。すなわち、露払い（千歳）、翁面（白式尉）、三番猿楽（三番三）、延命冠者、父尉（ちちのじょう）の五役の完備した翁舞で、この配役は鎌倉時代後期の弘安六年（一二八三）に初めて文献上に現れる、完形の翁猿楽のそれを伝承したものと信じられる。

薪猿楽や御祭猿楽などの南都神事猿楽では、権守に率いられた年預役と呼ばれる集団によつて右のような古形の翁が演じられ、その後には演能が続くという形が江戸時代まで行われていた。その前身は長と呼ばれる長老格の役者に率いられた翁猿楽座であったが、江戸

期に入り、前代からかううじて存続していた翁猿楽座が次第に形骸化の一途をたどり、明治維新を機に廃絶した。これらについては、表章氏『大和猿楽史参究』（岩波書店）所収の論考に詳述されるところである。この翁猿楽に関する江戸後期の演出資料が法政大学能楽研究所蔵若窟文庫に保存されており、また同研究所蔵世新九郎家文庫や観世文庫にも、室町後期から江戸初期にかけての翁猿楽資料が伝存する。表氏論考に導かれつつ、こうした諸資料を検討して復元したのが、今回の「もう一つの翁」である。

この研究は、竹本が主宰し、三宅晶子横浜国立大学教授・高桑いづみ東京文化財研究所音声映像記録研究室長・山中玲子法政大学教授を演博COE客員講師に迎えて二〇〇五年六月より開始した。当初より横浜能楽堂との連携事業として位置付けられており、台本作成・演出復元その他の研究面を研究者グループが、マネージメント面を横浜能楽堂（担当は中村雅之氏・戸井田香苗氏・熊谷敬子氏）が分担した。これ以前から、この翁のシテは観世鍔之丞師にとの心づもりがあり、研究会に

先立つ同年四月に高桑氏・中村氏とともに鍔之丞師にお目に掛かり、ご協力をお願いした。以上に、演劇博物館演劇研究センター特別研究生数名を加えたのが、この研究グループの全メンバーである。資料検討にはば一年以上を費やし、稽古が開始された二〇〇六年秋にもまだ完全な本が出来ていなかったほどである。しかし稽古を重ねる間に、文字資料だけからではわからない演出上の処理の問題が解決でき、少しずつ基礎台本が出来上がっていった。この間、鍔之丞師を初めとする出演者各位には多大のご尽力を賜った。記して御礼申し上げたい。

今回復元するのは、江戸時代中期頃に春日若宮御祭で演じられていた翁の演出である。室町時代までは能楽四座参勤が原則であった大和の神事猿楽は、戦国時代の荒廃から豊臣秀吉による南都神事復興を経て江戸時代前期に至り、観世座が参勤を免除されると共に残り三座の内の二座の交代による参勤の形となった。ただしこれは金春・金剛・宝生の能座三座の内の二座が能と狂言を演じるのであつて、翁だけは能楽の座衆を交えず、三座の年預衆のみで立合形式で上演したのである。例えば前記表氏説によれば、若宮御祭の御旅所前での上演の場合は、千歳が各座分三度舞われ、三人の権守による立合の翁謡の途中から、十二月往来を一对二の掛け合いで行い、三人の翁の相舞の翁舞の後、千歳の内の一人が三番叟を舞い、もう一人が延命冠者を演じ、さ

らに権守の一人が父尉を演じる。この形だと合計六人の立ち役が必要となるのだが、野外での上演を前提として初めて可能な人数であり、能舞台の上では到底さばき切れないので、あえて今回は両座の権守の立合という形を取った。なお上掛の場合でも、年預の翁猿楽では、千歳と面箱持ちを兼ねるという、能の翁の下掛形式と同じ演式である。

観世権守と宝生権守という組み合わせは、室町期の資料が比較的多くある上掛の翁を念頭に置いて採用した。四座の立合形式の翁というのが、四座参勤を宗とする南都神事猿楽の通例であつたが、一座が欠落した江戸初期には三座の立合形式に変化した。今回は、もしも両座立合の形であつたら、このようであつたろうとの想定に基づく復元であることをお断りしておく。一座単独で神事祭祀に出動するような場合には、当然立合形式ではない翁を演じたことであろう。五名の出演者に露払い以下の五役が肩書きされている、弘安六年春日臨時祭の翁猿楽は、そのような形式であつたことがわかる。ただし立合形式でない場合、立合形式を前提とする十二月往來を演じる場面が想定できず、演出上別種の翁猿楽になる可能性も考えられるし、舞台上の魅力も減じるので、今回は資料的な裏付けを得やすい立合形式にした。

今回の舞台進行は左記のようである。

まず面箱（観世方山本東次郎・宝生方山本則重）と権守（観世方観世鏡之丞・宝生方田

崎隆三）が登場し、両権守が立礼をする。（立礼というのは、地面で演じるための様式であるが、今回は資料に従った。）面箱が着座すると、囃子方以下が登場する。

次に翁の謡い出しとなり、二人の権守と地謡による掛け合いの謡を謡う。

次に千歳が立つて舞う。前半を観世方千歳、後半を宝生方千歳が入れ替わって舞う。（本来は同じ千歳舞を二度舞ったのかも知れないが、重複感があるので、このような工夫を行った。こうした演出が実際に行われた可能性も念頭に置いた。）

千歳舞の後半に掛かる頃に権守は翁面を掛け、謡い出す。両権守は立つて拝舞した後、十二月往來となる。観世方権守の間に宝生方権守が応答する形式の掛け合いである。その後両権守の立合による翁舞となり、拝舞の後、口中で祈禱文を唱え、着座し、面を外す。

次に三番三となる。観世方千歳の採ノ段は、今回のみ「二日目の式（舞替）」という異式演出である。採ノ段の後、黒式尉の面を掛け、宝生方千歳と問答、鈴を受け取り鈴ノ段となる。三番三の舞の後、着座、面を外す（三番三の演出自体は現在と同じ）。

この間、宝生方千歳が延命冠者の面を、観世方権守が父尉の面を掛ける。そして延命冠者は立つて父尉を呼び出す謡を謡う。

次に父尉が名乗って舞を舞う。舞い終わって、兩人共に面箱の前で面を外し、元の座に着座する。

千歳が面箱を持ち、両座並んで幕に入る。囃子方が礼をして幕に入る。最後に両座の権守が立ち並び、立礼の後退場する。

今回の復元された翁猿楽は、立合形式であること、翁舞の直前に十二月往來があること、延命冠者と父尉が登場することが特色で、その点が現行の能楽の翁と異なる。現行諸流の翁は、とくに観世流のものが江戸後期の明和改正で大きく改訂されていることなどから、しばしば新しいものだと言われ方がされるが、実はその起源はよくわからない。翁に関する詞章や演出資料はほとんどなく、あつても時代の下るものが多い。要するに口伝が中心であつたのだろう。しかし神事猿楽の翁座を伴わない形であっても、演能の冒頭に翁を上演するのは古くからの慣習であつた。ところが翁付きでも翁の存在を明示しないのが古い能番組の通例であるため、一見すると翁の有無がわからないのである。今回復元する翁と現行の能の翁との分岐点は、恐らくは世阿弥時代なのであろう。今熊野猿楽において、観阿弥が初めて足利義満台覧の榮に浴したとき、それまで宿老次第に舞っていた翁を大夫が舞うという伝統を創始したのが観阿弥であつた。それ以後、「翁面・三番猿楽・父尉」の「式三番」の内、「父尉」が省略された演出が京都で広まり、今に至つたと考えられる。「もう一つの翁」は、そうした省略を経ていない古態なのである。

（早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長）